

2022 年 12 月 18 日（日）「主の日に訪れた啓示」

ヨハネの黙示録 1:9-11

9 私は、あなたがたの兄弟であり、共にイエスの苦難と御国と忍耐とにあずかっているヨハネである。私は、神の言葉とイエスの証しのゆえに、パトモスと呼ばれる島にいた。10 主の日、私は霊に満たされ、後ろの方でラッパのような大きな声を聞いた。11 その声は言った。「あなたが見ていることを巻物に記し、エフェソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアの七つの教会に送れ。」

【序論】

「主の日」、それは聖徒が集まる日です。どこに、何のために集まるか。共に礼拝し御言葉に耳を傾けるためでしょう。この教会も 1994 年から今に至るまで、その営みを続けてまいりました。2020 年からコロナへの対応が迫られ、礼拝のオンライン化が余儀なくされましたが、それでも私たちは顔を合わせ、同じ空間で賛美をささげ、共に説教を聞き、交わりを持つという原点に立ち返ろうとしています。この最も基本的な営みを守っていくことは、一昔前には当然と思っていましたが、これからは様々な障壁を乗り越えなくては叶わなくなるかもしれません。今私たちを取り巻いている数々のリスクがあるからです。社会情勢が激変していくとき、私たちはもしかしたら集まることすら困難になるかもしれない。電気がブラックアウトしたりインターネットが遮断されたりした場合、オンライン配信もできなくなります。そのようなとき、私たちはどのように「主の日」を守っていくべきか、日頃から考えつつ歩んでいる必要があるのです。私の身に何かがあった場合、牧師不在の状況で各々が聖書を読み、福音のメッセージを聞き取り、あるいは語らなくてはならないということもあるかもしれません。だから、一人ひとりが信仰的に自立していること、互いに養い合えることが如何なるときにも大切になってくるでしょう。教会として、そのような心備えを持っておく必要があるのです。

【本論】

ヨハネの黙示録が書かれた 1 世紀末、ローマ帝国の迫害下にあったキリスト教会は、指導者不在の中でまさに上記のような試練に晒されていました。この時代の教会の戦いを見ることは、今黙示録を学ぼうとしている私たち読者にとって重要な意味を持つでしょう。10 年前であればまだ現実味がなかったかもしれませんが、今はそうではありません。真剣にリスクと向き合い、何が起きても信仰を守り抜くことができるように、具体的に考えながら歩んでいる必要があるのです。できる限りリアリティを持って、当時の状況を読み取っていきたいと思います。

本論 1. 苦難と御国と忍耐

私は、あなたがたの兄弟であり、共にイエスの苦難と御国と忍耐とにあずかっているヨハネである。私は、神の言葉とイエスの証しのゆえに、パトモスと呼ばれる島にいた。(1:9)

ここで著者の名前が明確化されていますが、以前にも申しましたように、ヨハネとは主イエスの十二弟子の一人であったヨハネであるか、あるいは異なる教会指導者であったかは分かりません。伝統的な立場に立つならば、使徒たちの中で最後の生き残りであるゼベダイの子ヨハネが、90 歳という高齢にしてパトモス島に流刑になっていたということが想像されます。パトモス島は現在も依然として存在しますが、エーゲ海に浮かぶ群島の一つで、南北 16km、東西 9km という細長く小さな島です。岩山が多く耕作には向かない土地で、ローマ帝国時代には犯罪者の流刑地とされていたようです。伝説では、ヨハネはパトモス島の鉱山で強制労働をさせられていたとか。



帝国は、教会を弾圧するに当たって、有力な指導者を捕えて教会から引き離す手段を採りました。ドミティアヌス帝の時代、迫害は激化しましたが、ヨハネはその時に捕えられたようです。しかし、後の皇帝ネルウァ（96-98 年）の頃、パトモス島から解放されたとも言われています。流刑は当事者にとって、本土から引き離され、朽ち果てるに任されるので、ひたすら餓死するのを待つという精神的な苦痛があったようです。この時のヨハネの精神状態は分かりませんが、先々の不安と肉体的疲労の極地にあつて、神からの特別な啓示にあずかったのです。

ヨハネは手紙の受取人に対して、自分のことを「あなたがたの兄弟」と言っています。ここには彼の特別な愛情が感じられる。同じ信仰に立ち労苦を共にしている同志という思いが込められているでしょう。物理的に離れていても心ではつながっており、共に戦っている。

ヨハネは、「共にイエスの苦難と御国と忍耐とにあずかっている」と言っています。ここに出てくる三つのことば「苦難」「御国」「忍耐」を丁寧に理解しておきましょう。少し順序を入れ替えます。

苦難……主イエスが福音のゆえに味わったと同質の苦しみを信徒も味わう

忍耐……神を待ち望む信仰をもって患難を耐え忍ぶ

御国……神の恵みの支配に覆われ、信徒自身の内に「御国」が存在する

順序を入れ替えた理由は、この中で「苦難」と「忍耐」は意味上のつながりを強く感じるのですが（苦難を耐え忍ぶ）、「御国」は少々異質に感じられるからです。「苦難と忍耐を経て御国の完成に至る」と言いたいところですが、「御国」がなぜかこの真ん中に入っている。ここにはヨハネの深い「御国の支配」の理解が隠されているでしょう。御国は既に信徒の直中にあり、「未だ実現していない事柄」ではないのです。むしろ、信徒の内ではじまった御国の支配によって、如何なる苦難をも耐え忍ぶことができる。そのことをヨハネは伝えようとしているのでしょう。

ヨハネは犯罪を犯して島流しに遭ったものではありません。「神の言葉とイエスの証しのゆえに」、すなわち復活の主の証人として罪の赦しの福音を宣べ伝えた結果、世に憎まれたのです。このような幸いな人生を選び取るところに、どうして迫害が伴わなければならないのか。それは、悪魔を頭とするこの世の支配者層が実現しようとしている世界は、キリストの王国に対立しているからです。

本論 2. 主の日に受けた啓示

主の日、私は霊に満たされ、後ろの方でラッパのような大きな声を聞いた。(1:10)

ヨハネが啓示を受けたのは「主の日」であったことが強調されています。平日ではありません。この時代、既に教会は日曜日を「主の日」として礼拝に当てていました。主イエスが復活されたのも（ヨハネ 20:1 等）、弟子たちに現れたのも（ヨハネ 20:19）、弟子たちが集会を持ったのも（使徒 20:7、I コリント 16:2）「週の初めの日」であったからです。本土で生活を営んでいる信徒たちも、迫害下にあつて密かに礼拝を守り続けていました。そして、捕えられ流刑になった使徒のために祈りがささげられていたことでしょう。もう二度と会えないかもしれないということを覚悟しつつ、これからどのように教会を守っていくべきかを考えていたと思われます。同じ「主の日」に、それぞれの場所で礼拝がささげられていました。当時、労働者は日曜日にも仕事に出なくてはなりませんでしたが、信徒たちはまだ暗いうちに集まって礼拝をささげ、日の出とともに仕事に出かけ、帰ってくると夕方また集まって礼拝を守り、その中で聖餐式を行っていたようです。離れていても礼拝を守り続けることが重要でした。

ある「主の日」、ヨハネは聖霊に満たされ、恍惚状態に入り、そこでこの世のものではない声を聞きました。それが御使いの声だったのか、主イエスの声だったのかは分かりません。天来の不思議な声によって、神が教会に示そうとしておられる世の終わりの出来事が啓かれ始めたのです。「ラッパのような大きな声」とありますが、黙示録では8章以下で御使いのラッパが七度吹き鳴らされることとなります(8:2-11:15)。その幕開けとなるような響きだったのでしょう。

ここで、私たちが覚えておきたいことがあります。それは、神が教会に対して御心を示してくださるのは、主の日の礼拝の時であるということです。それ以外にないと言っているではありません。しかし、信徒がひと所に集まり、心を合わせて賛美をささげ、御言葉に耳

を傾けているとき、聖霊が最も働きやすい環境が整えられるのです。ヨハネはこの時、パトモス島でただ一人礼拝をささげていたのかもしれませんが。しかし、心は本土の信徒たちと共にありました。聖書すらないような環境だったかもしれませんが。しかし、ヨハネは心に蓄えられた御言葉によって生きていました。そこに聖霊は臨んだのです。信徒一人ひとりの顔を思い浮かべ、賛美をささげ、御言葉を復唱し、祈りをささげていたとき、神の霊が力強くヨハネに臨みました。

私たちにとりましても、讃美歌をそらで歌えるようになることや聖句を覚えることは大切です。この世界から聖書がすべて取り去られたとしても、心に蓄えられた御言葉を信徒たちが残していくことができるでしょう。心に蓄えられたものは誰も奪うことができません。病の床にあるときも、それを思い出すことができるはずです。

本論 3. 七つの教会へのメッセージ

その声は言った。「あなたが見ていることを巻物に記し、エフェソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアの七つの教会に送れ。」(1:11)

ここに出てくる七つの教会名は、2～3章にかけて一つひとつ取り上げられていきます。これらの教会の具体的な状況が示され、ふさわしい勧告が与えられていく。「七」は完全性を表し、アジア州全体の教会を代表していると思われます。そして、そこで語られている真理は、すべての時代のキリスト教会へのメッセージともなっている。ここで選ばれた七つの教会には、おそらくヨハネが直接的に関わりを持っていた信徒がいたのでしょう。コロサイ、ヒエラポリスといった大きな都市名が挙げられてもよいところですが、ここに出てこないということは、ヨハネとさほど深いつながりがなかったことを窺わせます。

各教会への具体的なメッセージは改めて学ぶことになりますが、今日はザッと概観しておきましょう。

エフェソ 労苦と忍耐、自称使徒の偽りを見抜いたことを誉められるが、初めの愛から離れてしまった点でお叱りを受けている。

スミルナ 苦しみと貧しさの中にあっても、霊的には富んでいると励まされる。

ペルガモン サタンの王座にあっても忠実に歩んでいることを誉められるが、ニコライ派の教えを広めている人々を放置している点を指摘される。

ティアティラ 愛と信仰と奉仕と忍耐を誉められるが、預言者イゼベルの惑わしを放置している点でお叱りを受ける。

サルディス 霊的に死んだ状態であることが指摘され、悔い改めが求められる。

フィラデル 小さな力によって、主イエスのことばを守り、その御名を否まなかったことが誉められる。

ラオディキア 熱くもなく冷たくもない信仰への厳しい叱責を受ける。

これらの教会へのメッセージを聞くとき、一牧師として感じるがあります。それは、各教会の現状を知っていたとしても、ストレートに真実を述べるのは難しいということです。信徒を傷つけないようにとか、守秘義務であるとか、誰かからの反論とか、いろんなことを考えてしまう。しかし、ヨハネは主イエスからのメッセージを何の着色もせず、臆せず、伝達しました。実は、ここにこそ預言者としての真の生き方があるのであって、彼が人の目ではなく神を畏れていたことが分かります。自分はどうかということが問われてくる。そして、このようなメッセージを聞く者にとっても、それをキリストのことばとして受け留めることができるかどうか問われているのです。

【結論】

時が迫っているとき、言葉にオブラートを被せている場合ではないことがあります。ヨハネの置かれた状況とはまさにそうだったのかもしれません。自分がいつ死ぬかも分からない中で書いている「手紙」です。彼は心からの愛を込めて、教会が真理に立ち続けるための道を説いたのです。彼の思いの向こう側には主イエスの思いがありました。ヨハネは主の思いを取り次いだに過ぎなかったのです。私たちの教会はどういう状態にあるのでしょうか。主イエスはどのように見ておられるのでしょうか。今、私たちの生き方を見て、主は何とおっしゃるのでしょうか。そのことを各々が考え、自分自身へのメッセージとして受け留めていく必要があるのです。主イエスがいつ来臨されてもおかしくはない時代です。心を引き締めて信仰の道を歩み続けたい。私たちの信仰が守られるように常に祈ってくださっている主イエスがおられること、共にいて支えてくださっている聖霊の臨在があるということを忘れずに歩んでまいりましょう。

【祈り】

この日をおつくりになった天の父なる神様。私たちは主の日を喜びます。聖徒が集まり礼拝をささげられる幸いなひと時であり、私たちの生活の基盤、人生の礎です。御言葉を聞く私たちに御心をお示してください。この生涯をあなたのものとし、永遠のいのちのうちに歩ませてください。ヨハネに啓示をお与えになったあなたが、私たちにも御言葉をとおして生きる知恵と力で満たしてくださいますように。この週も一人ひとりの生活に主が伴っていてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

主の日を創造し、聖徒を御許へ呼び集め給う、父なる神の愛、

七つの教会に語りかけ、全世界、全歴史に生きる民に御心を示し給う、主イエス・キリストの恵み、

地上の生涯を歩み抜く知恵で満たし、永遠のいのちのうちにあらせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。